早稲田大学高等学院
2022年度　入試問題の訂正内容

＜高等学院　一般入試＞

【国語】

●問題冊子８ページ：設問三　問四　問題文

（誤）

「水には～をいかに焼くべき」

（正）

「水には～をいかが焼くべき」

以上

早稲田大学高等学院
2022年度　一般入試

国語

（問題）

2022年度

〈R04162061〉

注意事項

1　試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2　問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3　解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4　記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（4）解答用紙は折り線のところで山折りにしてから解答すること。

（5）字数指定のある問いに答える場合は、句読点などの記号も字数に含めるものとする。

（6）字はすべて丁寧に書くこと。

5　解答はすべて所定の解答欄に記入すること。

6　試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

7　いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

8　この問題冊子は持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

長い間、日本は西欧先進国に追いつけ追い越せで「近代化」を進めてきた。それが終わったという認識が広がっていくのが一九八〇年代である。従前は外部に、「欧米」という明確な先進モデルがあり、フォローすべき目標が明確であった。それまでは、いわば「キャッチアップ型近代化」を日本が進めてきた。そうした近代化の過程（六〇～七〇年代まで）では、はっきりしたゴールが存在した、あるいはモホウすべきモデルが明確にあったと日本の政策立案者が認識していたということである。[1]

八〇年代に時代認識が変わり、モデルは外にはない、自分たちで答えを見付けなければならないという気運になる。そのためには大学は自らを変えていかなければならない。自ら教育を変えることによって、不透明な時代にあってもわが国が進むべき道を自らが切り開く教育や人材の育成を行うことが要請されるようになったのである。ここには大きな論理転換があった。

従来は外にモデルがあり、そこに向かって近代化を進めた。その際の大学とは、外から知識を導入し、それを日本語に直して教えることが中心であると見なされた。あるいは科学技術を海外から学んできて、それを自分たちの中で再開発し、付加価値を付ける。そのための技術的訓練は企業内の現場での訓練を通して行われたが、それを可能にする基礎的な知識や訓練能力を備えた人材は大学までの教育が提供してきた。

経済がうまくいっていた時代にも、社会の変化に対応できていない大学という批判が政策文書に数多く登場した。だが、そうした批判に基づいて大学を抜本的に変えようという政策は提出されなかった。

ところが、キャッチアップを完了したという意識を持ち、しかもバブル経済の破綻によって、経済の停滞が長期化することとなった。経済の停滞が長期化すると、財界や政府は大学を経済復興の要として位置づける政策を立て続けた。かつては言葉の問題にとどまっていたものが、実際に大学を変えなければ、という動きにつながった。

未来の不可知の社会変化に対応するためには、自分で考えることができる主体性のある人材を育成しなければならない。「主体性」が前面にクローズアップされた結果、小学校から大学まで、現在の教育改革では、アクティブ・ラーニングが主要な教授原理となって提唱されている。[2]受け身の学びから、学生が自ら参加する主体的＝アクティブな学びに変える。そのことで主体的な個人の育成ができるはずだというペタゴジー（教授学）を前提としている。

だが、「主体性」とは何か。実はよくわからない曖昧（あいまい）な言葉である。どのような学びをすればどのような主体性が育つかという関係も確定的ではない。見た目で学生の参加や発言を促す授業をすれば、それが「主体的な学び」＝アクティブ・ラーニングだという認定が行われる程度である。ほとんど言葉遊びのレベルとなっていると言わざるをえない。

大学で行われるアクティブ・ラーニングの一般的なスタイルは、学生を何人かのグループに分け、課題を与え、話し合いの議論を行わせる。それが終わった時点でそれぞれのグループに発表の機会を与えるといった方法をとる。だが、[3]そのような話し合いと発表という形だけ取り入れても、「深い学び」に結び付く保証はない。

このような「アクティブ」な授業によってどのような「主体性」が育成されるのかは不明のままである。それというのも、授業の形態は記述し文章化し、解説できても、実際に生徒や学生の頭の中で何が行われているかを言語化することは非常に難しいからだ。そうした学習の成果を評価することにも非常な困難が伴う。

ポイントは、教員側の能力である。「主体性」の育成につながる学習が実際に行われているかどうか。失敗例があげられてもそれに具体的な実践が当てはまっていると適切に判断できるか。それらを的確に判断できる力が教員側になければ、いくら参加型の授業を採用しても、[4]それは形だけのものに終わる。それでは、そのような教員の判断力をいかに育成できるかというと、そこにも具体的な手立てがあるわけではない。そのようなことをほとんど不問に付したまま、教員にそうした能力が備わっているはずだ（あるいは育成可能だ）ということを前提に、小学校から大学まで、「主体的な学び」が求められたのである。

予測不能な未知の変化への対応に必要な能力や資質とは何か。そもそも答えのない問題を自ら発見し、その原因や仕組みを考え、よりましな解を導くには、具体的に何をしたらよいのか。そこにはいかなる能力や知識が求められるのか。それはどのようにすれば育成できるのか。誰がそれを評価できるのか。さらには、そうした評価ができる教員はどうすれば養成できるのか――これらの問題を具体的なレベルで考えていくと、容易ではないことがすぐにわかる。そもそも、こうした知の生産について熟知し、それを使いこなせる能力を備えた人たちが大学の教員になっているのか、といった

疑問さえ浮かぶ。二〇二〇年に始まった新型コロナウイルスの感染拡大に教育現場がどのように対応してきたかを実態把握し、帰納的に考えてみるだけでもよい。C未曽有の変化に対し、大学を含めてそもそも主体的に考え、主体的に対応できる資質や能力を日本の教育界は備えてきたのか。

過去や現状を一度否定したうえで、しかし大学はこうあってほしいという期待を、政策言説は描き出してきた。そして、八〇年代末から九〇年代以降、より顕著になっていたのが、5変化への対応を大学に求める政策言説、より具体的には変化に対応できる能力や資質の育成をめざす大学教育の提唱であった。政策の力点が未来に照準されることで、不可知の変化に対応できる能力や資質の育成は、「主体性」の育成と見なされるようになる。この抽象的な論理の展開が、アクティブ・ラーニングの流行をもたらすこととなる。一方通行の講義形式の授業に替わって、学生参加型の教育が求められる所以である。だが、6エセ演繹型の思考様式で導入される新たな教授・学習法は、その成果が政策の目的を実現しているかどうかの具体的な評価方法を持たない。個々の教室レベルでも、はたしてそのような評価が可能かどうか不明なままである。

それでもこうした改革が求められるのは、大学が社会の要請に十分応えられていないという、日本に長年定着してきた大学性悪説というイメージが根強く定着しているからだ。社会の要請の中身は、A 志向へと大きく変わってきた。それだけにますます、具体的な目標・手段の設定が難しくなっている。にもかかわらず、こうした改革が続けられるのは、大学に自分で進むべき進路を拓いていく能力と資質を持った人材の育成が求められるからだ。

それが奇妙な形で「日本再生」という名の経済復興に結び付けられることで、大学性悪説をもとにした大学改革が力を得るようになった。だが、アクティブ・ラーニングについて論じたように、ときどきの流行の教育思潮を海外から取り入れ、それを日本の現実に当てはめるのでは、実を得ない。そもそも学生に多くを読ませるような多大なインプットを要求しないまま、話し合いや発表の機会を持たせても、深い学びにはならない。多くを書かせる課題なしに、口頭による発表を求めるだけでは、思考力は育たない。読んで書くという行為が思考力を鍛えるうえで有効であることを、私たちは帰納的に知り得ている。多くの種類の授業をとらせ、講義形式の授業を中心にしてきた日本の大学のカリキュラムの構造（薄く広く学ぶための仕組み）は、そもそもそうしたぶ厚いインプットとアウトプットとを求める学習とはるかにかけ離れている。それでもこのような流行が起こるのは、一方通行の知識伝達型教育への不評が共有されているからだろう。これも一種の大学性悪説の一部であるが、そこからの安易な脱却が、カリキュラムの構造に大きな変更を加えないまま導入されたアクティブ・ラーニングの弊である。

大学とは基本的に知を生産・再生産する場である。大学の教師の多くは研究者として新しい知を生産し続ける。その過程で、多様な知識をどのように使いこなすか、それをいかに表現するかを研究という名のもと、生業としている。同時に、教育者としては、そうした知の生産に習熟した立場から、学生に知の生産の基礎を教えている。たんに知識を伝えるだけではなく、知識のつくり方も教えるから、大学は知の生産・再生産の場になる。

知識の生産・伝達・受容は日々行われる。そのために、オックスフォード大学のチュートリアルのように、知識のインプットもアウトプットも大量にこなすことで、思考力が育つという経験を積み上げてきた。それは、理想論からの演繹ではない。実際にそのような教授・学習方法が学生の思考力を鍛え上げるうえで効果を持ってきたことを、7経験を通して知っているから、繰り返されるのである。大学への信頼はそのような実績から生まれる。大学性悪説を前提に改革を繰り返す日本の大学が、上滑りの改革に終始するのは、そのような信頼を勝ち得るための余裕を大学に与えないまま、次々と改革が付け加えられていくからだ。

（苅谷剛彦『コロナ後の教育へ』より・一部改）

語注

＊キャッチアップ　追いつくこと。

＊所以　理由。

＊オックスフォード大学　英国の大学。ここで筆者は教鞭を執っている。

＊チュートリアル　少数の生徒に教師が集中的に教えること。

問一　傍線部a～cのカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二　傍線部1はどのような認識に変わったということか。「という認識に変わった」に続く形で、本文中から十二字で抜き出して答えよ。

問三　傍線部2のような考え方を筆者は批判を込めて端的に何と表現しているか。本文中から三字で抜き出して答えよ。

問四　傍線部3のように言えるのはなぜか。次のように答えるとして、その空欄に入る言葉を本文中から十字で抜き出して答えよ。

そのような学びには［　　］が欠けているから。

問五　傍線部4と同じ意味を表す四字熟語を次のように答えるとして、その空欄に入る漢字二字を答えよ。

有名［　　］

問六　傍線部5のような「政策言説」や「提唱」は何を目的としてなされたものか。本文中から四字で抜き出して答えよ。

問七　傍線部6「エセ演繹型の思考様式」と関連するものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　自分の進路を拓いていく能力を持った人材の育成までも大学の教育に要求すること。
イ　様々な問題点を具体的に検討することなく、政府が新たな学習法を押しつけること。
ウ　海外で流行している学生参加型の教育思潮をそのまま日本の現実に当てはめること。
エ　具体的な評価方法の必要性を認識せずに、アクティブ・ラーニングを導入すること。
オ　主体的能力が不要とされている日本の大学に主体性のある学生の養成を求めること。

問八　空欄Aに入る言葉を本文中から一語で抜き出して答えよ。

問九　傍線部7「経験を通して」と同じ内容を表す言葉を本文中から四字で抜き出して答えよ。

問十　次の中で本文の内容と合致しないものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　大学は知識の生産が日々行われる場であるが、日本の大学教員がその具体的な方法に熟達しているとは必ずしも言えない。
イ　アクティブ・ラーニングの流行をもたらしている抽象的な論理展開は、日本の大学の主体的な資質や能力を低下させている。
ウ　日本の大学が信頼されないのは、大学のカリキュラムを余裕のある構造にすることなく、改革だけを付け加えるからである。
エ　現在の教育改革でアクティブ・ラーニングが提唱されている背景にあるものは、一方通行の知識伝達型教育への不評である。
オ　従来は、企業内で行われる技術的訓練のための基礎的知識や能力を身につけさせることが、大学教育の主たる役割とされていた。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

わたしたち現代人は、生と死のあいだに明確な一線を引くことができると考えている。ある一瞬を境にして、生者が死者の世界に移行するというイメージをもっている。だがわたしたちにとって常識となっているこうした死生観は、人類の長い歴史のなかでみれば、近現代にだけみられる特殊な感覚だった。

前近代の社会では、生と死のあいだに、時間的にも空間的にもある幅をもった中間領域が存在すると信じられていた。呼吸が停止しても、その人は亡くなったわけではない。生と死の境界をさまよっていると考えられたのである。

前近代の社会では、生と死が交わる領域は呼吸が停止してからの限られた期間だけではなかった。生前から、[1]死後の世界へ向かう助走ともいうべきさまざまな儀礼[a]が営まれた。死が確定して以降も、長期にわたって追善供養が続けられた。生と死のあいだに一定の幅があるだけではない。その前後に生者の世界と死者の世界が重なり合う長い期間があるという認識が、前近代の人々の一般的な感覚だった。

生者と死者は、交流を続けながら同じ空間を共有していた。生と死そのものが、決して本質的に異なる状態とは考えられていなかったのである。

こうした前近代の死生観と対比したとき、近代が生と死のあいだに **A** 不可能な一線を引くことによって、生者の世界から死を完全に排除しようとした時代であることが理解できるであろう。

いまの日本では死は周到に隠蔽（いんぺい）され、人間でも人以外の動物でも、生々しい死体を直接目にする機会はほとんどなくなってしまった。普段の食事で、牛や鳥や魚の死体を口に運んでいるという感覚を持つことはまずありえない。だれもが死ぬという当たり前の事実すら、公然と口にすることを憚（はばか）る風潮がある。

いったん人が死の世界に足を踏み入れてしまえば、慌ただしい形式的な葬儀を終えて、親族はただちに日常生活に戻ってしまう。別世界の住人であるがゆえに、死者はもはや対等の会話の相手とはなりえなかった。死者の側の能動性は失われ、生者による一方的な追憶と供養の対象と化してしまうのである。

かつて人々は死後も縁者と長い交流を継続した。それは、やがて冥界で先に逝（い）った親しい人々と再会できるという期待に裏打ちされた行為だった。それはまた、自分自身もいつかは墓のなかから子孫の行く末を見守り、折々に懐かしい家に帰ってくつろぐことができるという感覚の共有にほかならなかった。「供養絵額（えがく）」や「ムカサリ絵馬（えま）」のように、死者の世界を可視的に表現した記憶装置も数多く作られた。

死後も親族縁者と交歓できるという安心感が社会のすみずみまで行き渡ることによって、人は死の恐怖を乗り越えることが可能となった。そこでは死はすべての終焉（しゅうえん）ではなく、再生に向けての休息であり、生者と死者との新しい関係の始まりだった。死はだれもが経験しなければならない自然のセツリ[b]であることを、日々の生活のなかで長い時間をかけて死者と付き合うことによって、人々は当たり前のこととして受け入れていったのである。

しかし、死者との日常的な交流を失った現代社会では、人間の生はこの世だけで完結するものとなった。死後世界はだれも足を踏み入れたことのない闇の風景と化した。ひとたび死の世界に踏み込んでしまえば、二度とわが家に帰ることはできない。親しい人、愛する人にも、もはや会うことは叶（かな）わないのである。

近代人にとって、死は現世と切断された孤独と暗黒の世界だった。死がまったく道標のない未知の道行（みちゆき）であるゆえに、人は生死の一線を越えることを極度に恐れるようになった。どのような状態であっても、患者を一分一秒でも長くこちら側の世界に留めることが近代医学の使命となった。いま多くの日本人が生の質を問うことなく、延命を至上視する背景には、[2]生と死を峻別（しゅんべつ）する現代固有の死生観があるのである。

近代社会の特色は、この世界から人間以外の神・仏・死者などの超越的存在＝カミを、他者として放逐してしまったところに求めることができる。中世でも近世でも、人と死者は親密な関係をたもっていた。神仏もはるかに身近な存在だった。近現代人は「世界」といった時に、あるいは「社会」といった時に、その構成員として人間しか頭に思い浮かばない。しかし、中世や近世の人々の場合は違った。そこでは人間だけではなく、神・仏・死者・先祖など、不可視のカミをも含めた形でこの世界が成り立っていると考えられていた。

ヨーロッパ世界から始まる近代化の波動は、公共圏から神や仏や死者を追放するとともに、特権的存在としての人間をクローズアップしようとする動きだった。これは人権の観念を人々に植え付け、人格の尊厳の理念を共有する上できわめて重要な変革だった。近代に確立する人間中心主義としてのヒューマニズムが、社会の水平化と生活者の地位向上

に果たした偉大な役割は疑問の余地がない。

しかし、他方でこの変動は深刻な問題を惹き起こすことになった。カミが公共空間を生み出す機能を停止したことに伴う人間間、集団間の緩衝材の消失であり、死後世界との断絶だった。かつてのように親族が重篤者を取り囲んで見守り、その穏やかな臨終と死後の安息を祈る光景は姿を消し、生命維持装置につながれた患者が、本人の意思にかかわりなく生かされ続けるような姿が常態化することになったのである。

およそこれまで存在した古今東西のあらゆる民族と共同体において、カミをもたないものはなかった。信仰の有無にかかわらず、大方の人にとってカミはなくてはならない存在なのである。

わたしたちが大切にする愛情や信頼も実際に目にすることはできない。人生のストーリーは可視の世界、生の世界だけでは完結しない。たとえそれが幻想であっても、大多数の人間は不可視の存在を取り込んだ、生死の双方の世界を貫くストーリーを必要としている。

いま日本列島においても世界の各地でも、現実社会のなかに再度カミを引き戻し、実際に機能させようとする試みが始まっているようにみえる。二〇一三年秋、わたしは「介護と看取り」をテーマとするシンポジウムに参加するため北京を訪れた。終了後に、中国のホスピスの現状をみせていただくために万明医院という病院を訪問し、スタッフとコンダンする機会をもつことができた。

万明医院では病院の内部に、「往生堂」という名称の一室が設けられ、重篤な病状に陥った患者がそこに運ばれて、親族の介護を受けながら念仏の声に送られてあの世に旅立つシステムが作り上げられていた。敷地内の別の一室では、故人の遺体を前に、僧侶を導師としてたくさんの人々が念仏を唱えていた。その儀式は数日間続けられるという。[3]霊安室と死者の退出口を人目のつかない所に設けることによって、生と死の空間を截然と区別する日本の病院を見慣れていたわたしにとって、病院内に生の世界と死の世界が混在するこの光景は、たいへん衝撃的だった。

終末期医療や心のケアに宗教を介在させようとする動きは日本でも起きている。その代表的な運動が、東北大学をはじめ多くの大学で進められている臨床宗教師の育成である。「臨床宗教師」は、キリスト教文化圏におけるチャプレンに相当する存在で、「被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者」をいう。

新たに小さなカミを生み出そうとする動きも盛んである。わたしがいまの日本社会で注目したい現象は、列島のあらゆる場所で増殖を続けるゆるキャラである。もちろんディズニーのミッキーマウスをはじめ、動植物を擬人化したキャラクターは世界中にみられる。しかし、[4]その数と活動量において、日本のキャラクターは群を抜いている。これほど密度の濃いキャラクター、ゆるキャラの群生地は、地球上の他の地域には存在しない。

大量のゆるキャラが誕生しているということは、それを求める社会的需要があるからにほかならない。それはなにか。わたしは現代社会の息の詰まるような人間関係の［B］であり、ストレスの重圧に折れそうになる心の癒やしだと考えている。

現代社会におけるゆるキャラは、小さなカミを創生しようとする試みである。[5]この社会からカミを締め出した現代人は、みずからを取り巻く無機質な光景におののいて、その隙間を埋める新たなカミを求めた。その先に生まれてきたものが、無数のキャラクターたちだった。群生する大量のゆるキャラは、精神の負荷に堪えかねている現代人の悲鳴なのである。

二一世紀に生きるわたしたちは、近代の草創期に思想家たちが思い描いたような、直線的な進化の果てに生み出された理想社会にいるのではない。近代化は人類にかつてない物質的な繁栄をもたらす一方で、人間の心に、昔の人が想像もしえなかったような無機質な領域を創り出した。

この問題の深刻さは、すでに述べた通り、それが文明の進化に伴って浮上したものだということにある。いまそこにある危機が近代化の深まりのなかで顕在化したものであれば、人間中心の近代ヒューマニズムを［C］化できる長いスパンのなかで、文化や文明のあり方を再考していくことが必要である。

（佐藤弘夫『日本人と神』より・一部改）

語注

＊チャプレン　教会外の施設で働く聖職者。

問一　傍線部a～cのカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二　傍線部1に関して、近代社会におけるその具体的事例が書かれている部分を本文中から三十一字で探し、その始めと終わりの五字を答えよ。

問三　空欄Aに入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　転生　イ　回帰　ウ　滅却　エ　共有　オ　往還

問四　傍線部2の「死生観」によって意識されるようになったものは何か。それが端的に述べられている部分を本文中から四字で抜き出して答えよ。

問五　傍線部3はどのようなことの具体的事例と言えるか。次のように答えるとして、その空欄に入る言葉を本文中から九字で抜き出して答えよ。

現代の日本では［　　］ていることの具体的事例。

問六　傍線部4から考えられることとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　日本人は、他国の人よりも精神の負荷を耐えがたく感じている。
イ　日本人は、他国の人よりも無機的な社会関係の下で生きている。
ウ　日本人は、他国の人よりも日々の生活に安心感を持てていない。
エ　日本人は、他国の人よりも信仰の薄い文化の中で暮らしている。
オ　日本人は、他国の人よりもストレスが多い環境に置かれている。

問七　空欄Bに入る言葉として適切なものを本文中から三字で抜き出して答えよ。

問八　傍線部5の状況はどのような考え方から生じたのか。次のように答えるとして、その空欄a・bに入る言葉を本文中からそれぞれ指定された字数で抜き出して答えよ。

人間を【　a　】（五字）とみなす【　b　】（六字）から生じた。

問九　空欄Cに入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　内面　イ　相対　ウ　物神　エ　可視　オ　無効

問十　次の中で本文の内容と合致しないものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　近代社会はカミを他者として排除することによって人格の尊厳の理念を共有し、社会的な進化を達成してきた。
イ　不可視の存在を持たない民族や共同体はなく、それは幻想であったとしても大多数の人には必要なものである。
ウ　中世や近世の人々は、人間以外の超越的な存在とも同じ空間を共有し、それを同じ社会の構成員と考えていた。
エ　かつての人々は、子孫を見守り、折々もとのわが家に帰ってくる能動性が死者には備わっていると感じていた。
オ　前近代の人々の一般的感覚では、生者の世界と死者の世界が重なり合う中間領域が存在すると信じられていた。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1 やむごとなき人のもとに、今参りの侍、出で来にけり。焼絵をめでたくするよし、聞こえければ、前に呼びて、檀紙に焼絵をせさせけるに、「何をか焼き侍るべき」と言ひければ、「水に鴛鴦を焼け」と言はれけるに、うちうなづきて、

6 水には鴛鴦をいかが焼くべき

と口ずさみけるを、あるじ、聞きとがめて、「同じくは一首になせ」と言はれければ、かいかしこまりて、

8 浪の打つ岩よりひをば出だすとも

と言へりければ、人々、皆、ほめにけり。

（『今物語』より）

語注

＊今参りの侍　新しく仕え始めた従者。
＊焼絵　小さいこてなどで絵や模様などを紙や板などに焼き付けたもの。
＊檀紙　厚手の上質紙。
＊鴛鴦　おしどり。
＊かいかしこまりて　恐縮してひれ伏して。

問一　傍線部1「やむごとなき人」、2「めでたく」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

1　やむごとなき人
ア　品性のない人　　イ　意地の悪い人　　ウ　お金持ちの人　　エ　風流を愛する人
オ　高貴な身分の人

2　めでたく
ア　非常に珍しく　　イ　とても自慢げに　　ウ　すばらしく見事に　　エ　晴れがましい様子で
オ　たいそうにぎやかに

問二　傍線部3「言ひければ」・5「言はれけるに」の主語は何か。本文中から三字以上五字以内の言葉をそれぞれ抜き出して答えよ。

問三　傍線部4「水に鴛鴦を焼け」の解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア　水の中で鴛鴦を焼き殺すにはどのようにしたらよいのだろう。
イ　水の上に鴛鴦を焼絵で描いてみせよ。
ウ　水を使って鴛鴦の焼絵を描いてみせよ。
エ　水に浮かぶ鴛鴦の様子を焼絵で描いてみせよ。

問四　傍線部6「水には鴛鴦をいかに焼くべき」の解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア　水の中で鴛鴦を焼き殺すにはどのようにしたらよいのだろう。
イ　水の上に焼絵で鴛鴦を描くにはどのようにしたらよいのだろう。
ウ　水を使って鴛鴦の焼絵を描くにはどのようにしたらよいのだろう。
エ　水に浮かぶ鴛鴦という難しい焼絵はどのように描けばよいのだろう。

問五　傍線部7「一首」の形にしたときの始めの五字と終わりの五字を本文中から抜き出して答えよ。

問六　傍線部**8**「ひを」は掛詞（一語に二つ以上の意味を持たせる技法）になっている。一方では「氷魚」（アユの稚魚）を表すが、他方では何を表すか。「ひを」の「ひ」を漢字に直して答えよ。

〔以　下　余　白〕

国語解答用紙

（注意）
受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
解答は右に指定された欄に書くこと。

〈R04162061〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

三

問一 1 2

問二 3 5

問三 問四

問五 始め 終わり

問六 を

折り線

一

問一 a b c

問二 という認識に変わった

問三

問四

問五 問六

問七

問八 問九

問十

二

問一 a b c

問二 始め 終わり

問三 問四

問五

問六 問七

問八 a b

問九 問十

〈R04162061〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語 採点欄

三

問一 問二 問三・四 問五 問六

二

問一 問二 問三・四 問五 問六・七 問八 問九・十

一

問一 問二 問三 問四 問五・六 問七 問八・九 問十